

新しい農業・農村のスタイルの構築 「この先もこの土地で“てっぺん”目指そう！」

活動対象：東川町東部地区（14戸2法人）

水稲栽培技術の向上、大型水田に対応した高品質米生産、省力・低コスト生産技術の普及に努めた。また、女性農業者の経営参画を柱として若手女性農業者の経営参画推進を展開した。結果、適正な育苗日数等及び大型水田での水管理が5戸で実施され、水稲の生産性向上につながった。女性農業者への継続的な経営管理支援により、1戸が損益計算書・原価計算を作成した。

1 課題設定の背景

東川町では、平成29年に国営緊急農地整備再編事業が着工、平成30年より「東川米ハイクオリティ生産運動」（ハイクオリティ米＝良食味米・タンパク6.8%以下、10a当たり収量583kg以上）がスタートした。また、予てから学習機会が少ない女性・青年農業者に対する農業技術習得に関する要望があった。

- ☆水稲が基幹作物の地域
- ・平均年齢：59歳
 - ・平均耕作面積：24ha
 - ・後継者：5名
 - ・経営における水稲面積占有率：96%

2 活動の経過

	支援対象戸数	活動内容	H28	H29	H30	R元	R2	
水稲栽培技術の向上	H30～R1 ゆめぴりか栽培農家 9戸	① 良質苗生産 (育苗日数の適正化、温度及び水管理について)	[前段階として調査した期間]					
	H28～R2 大型水田作付け農家 8戸	② 生育期節にあわせた本田の適正な水管理 (初期の浅水管理と前歴期間以降の深水管理)	[前段階として調査した期間]					
大型水田に対応した高品質米生産	R2 大型水田作付け農家 8戸	③ 基盤整備後の大型水田に対する適正施肥 (土壌型に合わせた窒素減肥施肥)	[前段階として調査した期間]					
省力・低コスト生産技術の普及	H28～R1 ゆめぴりか栽培農家 9戸	④ 省力化栽培技術の普及 (無代かき栽培及び疎植栽培技術の普及)	[前段階として調査した期間]					
		⑤ 効果的な除草剤の使用と体系処理の省力化 (使用除草剤の見直しによる農業散布回数減少)	[前段階として調査した期間]					
若手女性農業者の経営参画推進	H28～H29 女性農業者 21名	⑥ 水稲栽培基本技術の習得及び向上 (研修会による栽培技術の習得と本田水管理の実践)	[前段階として調査した期間]					
	H30～R2 若手女性農業者 6名	⑦ 経営分析と栽培技術の習得 (簿記記帳結果を活用した経営分析の実践)	[前段階として調査した期間]					

[前段階として調査した期間]

3 活動の成果

【5年間の活動成果】

	活動内容	実績/目標				
		H28	H29	H30	R元	R2
水稲栽培技術の向上	① 良質苗生産			4戸/4戸	5戸/5戸	5戸/5戸
	② 生育期節にあわせた本田の適正な水管理	4戸/4戸	3戸/5戸	4戸/4戸	5戸/5戸	5戸/5戸
大型水田に対応した高品質米生産	③ 基盤整備後の大型水田に対する適正施肥					5戸/5戸
省力・低コスト生産技術の普及	④ 省力化栽培技術の普及	1戸/2戸	2戸/2戸	3戸/2戸		
	⑤ 効果的な除草剤の使用と体系処理の省力化			4戸/4戸	4戸/5戸	
若手女性農業者の経営参画推進	⑥ 水稲栽培基本技術の習得及び向上	3人/5人	5人/7人			
	⑦ 経営分析と栽培技術の習得			1人/1人	1人/2人	1人/2人



苗の生育状況から適期移植時期を提案



原価計算のための経営管理支援

○水稲栽培技術の向上

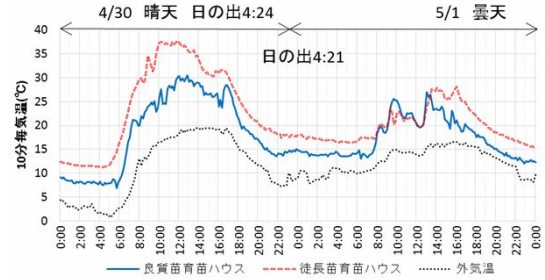
R2年苗質調査結果

	A	B	E	F	G	H	I	K	
草丈(cm)	14.0	12.8	10.6	12.7	12.3	13.9	15.2	15.5	
葉数(葉)	3.8	4.5	3.5	3.5	3.0	4.1	3.4	4.5	
育苗	R2	29	30	30	28	27	27	30	35
日数	H28	36	32	32	34	28	32	33	—
評価	○	○	◎	◎	◎	△	△	×	

適正な育苗日数及び温度、水管理により、良質苗を生産した農家は5戸となった。また、タイムリーな生育状況の発信により、本田の適正な水管理が実施された。

本田の水管理の変化(%)

調査時期(水深)	H28	R2
初期生育(5cm以下)	33	63
前歴期間(10cm以上)	22	63
冷害危険期(10cm以上)	33	88
冷害危険期(15cm以上)	0	38
調査戸数	9戸	8戸



ハウス内温度の推移

R2大型水田に対する適正施肥の取組み状況

	年数	土壌区分	提案施肥率	実施施肥率	評価
A	2	灰色低地土	60~80%	100%	多い
B	3	褐色低地土	100%	100%	○
E	1	褐色低地土	60~70%	63%	○
F	2	灰色低地土	60~80%	100%	多い
	1	褐色低地土	60~70%	53%	やや少ない
G	1	灰色低地土	40~60%	51%	○
	2	褐色低地土	90~100%	60%	少ない
H	1	灰色低地土	40~60%	34%	やや少ない
I	2	褐色低地土	90~100%	100%	○
K	3	褐色低地土	100%	100%	○

○大型水田に対応した高品質米生産

減肥の必要性の理解が進み、5戸が提案施肥率での施肥を実施した。この取組みがJA稲作生産部会での試験検討につながった。

○省力・低コスト生産技術の普及

無代かき栽培、疎植栽培の実証ほを設置し技術的課題を整理したが、技術の定着には至らなかった。また、新規除草剤の特性と適正使用への理解が進み、効果的な除草剤の使用が経費削減につながる事が理解された(4戸)。

無代かき栽培と疎植栽培

	具体的な活動内容と結果
無代かき栽培	礫が多く、漏水や移植精度の低下で実証ほ設置を断念。礫が多い地域のため、ほ場選定の必要性を確認した。
疎植栽培	労働力の軽減、コスト低下、収量品質への影響について整理を行った。苗が確保されており、疎植栽培の定着には至らなかった。



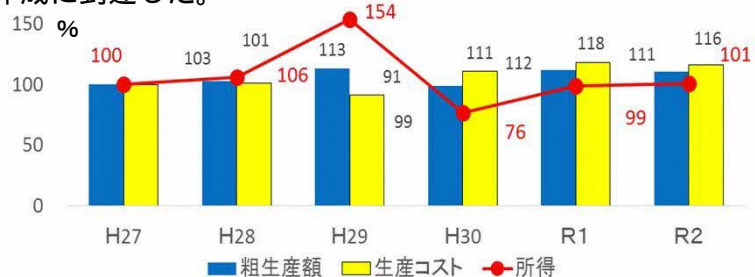
基盤整備後の減肥検討のため、土壌断面を調査

○若手女性農業者の経営参画推進

女性のための田んぼの教室には地域の女性農業者の8割が参加した。また、簿記記帳会での農業情報の提供が、意欲的な経営分析の取組みにつながった。「米の精算には2年かかりクミカンに出てくる道産米啓発普及事業拠出金が広告宣伝料だと初めて知った。」との声が聞かれた。1名が原価計算表の作成に到達した。

経営経済評価

粗生産額は、H30年に減少したが、R2年にはH27年対比で111%に増加した。一方、生産コストはR2年にはH27年対比で116%に増加している。



粗生産額には農業雑収入が含まれる。また、生産コストには専従者給与、減価償却費、固定資産圧縮損は含まない。

4 今後の活動

図 地域の10a当たりの粗生産額と生産コスト(H27を100%とする)

高品質米生産及び大区画水田における稲作の安定生産技術の向上を支援する。

また、担い手の育成と交流の推進を図る。

- | | |
|-----|--------------------------|
| 水稲 | ・ 土壌型別基盤整備後1~3年目の施肥方法の普及 |
| | ・ 高品質米生産技術の推進 |
| 担い手 | ・ 後継者の基本技術習得に向けた支援 |
| | ・ 雇用労働者の作業性改善 |